

第 105 回日本精神神経学会総会

シンポジウム

うつ病・不安障害に対するリハビリテーションの現代的役割 ——リワーク・プログラムの治療的意義——

座長 尾崎 紀夫, 五十嵐 良雄

企業においてうつ病や不安障害のために休職となる社員が増加すると同時に、復職後の再休職も多く、復職に際してのリハビリテーションの必要性と有効性が産業保健領域で認識され始めている。うつ病を治療する精神科医にとっては、自身の患者が休職した際に復職が可能であるかを診療の場面のみで判断することの困難さを感じると同時に、嘱託産業医や専門医として企業での復職を判定する立場では、上記のような場面に多く遭遇しているのではないかと推察される。本シンポジウムではその際のリハビリテーションの有効性とプログラムの実際に関する発表を 5 人より行い、フロアとの討論を通じてうつ病や不安障害で休職する患者に対するリハビリテーションの今日的な意味を考えることを目的とし、うつ病リワーク研究会

(表) が企画した。

われわれの調査によるとうつ病やうつ状態のために休職し、精神科医療機関で診療を受けている患者数は 20 万人と推計される。このような復職支援プログラムは企業の集まる大都市部でしか成り立たないと考えられがちであるが、施設の特徴を出せば必ずしも大都市部でなくとも一定のニーズは存在すると思われる点にも触れ、このようなプログラムを実施したいと考えている精神科医や医療機関への啓発普及も目的として企画された。

当日の発表は福島、横山、加藤、片桐の各演者から東京、札幌、春日井、宇治の各地区にあるクリニックまたは精神科病院で、各々が置かれた多様な環境の中で、リワークプログラムが行われている状況が紹介された。

その後、秋山はリワークプログラムの標準化された評価方法について述べたが、同時に本プログラムの根幹とも言うべき「全人的リハビリテーション」という概念を提唱した。ここで言う「全人的リハビリテーション」とは、休職中のうつ病患者がプログラムへ参加することによって、従来の自分とは異なる生き方を模索し、見出していく過程を意味する。さらに、休職前に持っていた「健康人としてのアイデンティティ」は、うつ病発症

表 うつ病リワーク研究会概要

-
- ・ 設立日：2008 年 3 月 29 日
 - ・ 所在地：東京都港区虎ノ門 1-2-11
交洋ビル 3 F (メディカルケア虎ノ門内)
TEL/FAX：03-5512-1161
 - ・ URL：http://www.utsu-rework.org
 - ・ E-mail：information@utsu-rework.org
 - ・ 会員数 (平成 21 年 8 月 16 日現在)
正会員：56 医療機関 180 名
準会員：15 医療機関 22 名
-

シンポジウム うつ病・不安障害に対するリハビリテーションの現代的役割——リワーク・プログラムの治療的意義——
座長：尾崎 紀夫 (名古屋大学大学院医学系研究科精神医学・親と子どもの心療学分野, うつ病リワーク研究会), 五十嵐 良雄 (医療法人雄仁会メディカルケア虎ノ門, うつ病リワーク研究会) コーディネーター：五十嵐 良雄 (医療法人雄仁会メディカルケア虎ノ門, うつ病リワーク研究会)

によって「病人としてのアイデンティティ」へと変化するが、それが「リワークにおけるアイデンティティ」へと移行する過程であると秋山は説明した。

この秋山が呈示したリワークプログラムの根本思想に対して、フロアから活発な意見が出された。主なものとして、『健康人としてのアイデンティティ』という職場に過剰適応していた状態にあった勤労者が、うつ病を発症して休職に至っているのであれば、今一度過剰適応することを支援するのは問題ではないか』との疑義が呈示された。それに対して、「決して過剰適応を促進するのがリワークプログラムではなく、他の参加者との交流

の中で新たな生き方を見出す過程を手助けするのがリワークプログラムである」との回答が秋山からなされた。

本シンポジウムでは、リワークプログラムを如何にして行うかという实际的、技術的な話を越え、初めの企画とはやや離れた方向での討論となったが、リワークプログラムの根本思想を問いただすという刺激的な論議が活発になされた。リワークプログラムの広まりとともに、その基本概念を確認して深化させるべき時期に至ったという思いを持ち、司会者にとっては大いに興味あるシンポジウムであった。